

# 東遊運動から東京義塾へ：『文明新学策』を中心として

著者	橋本 和孝
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	日越交流における歴史、社会、文化の諸課題，ハノイ，2013年11月13日-15日
ページ	119-129
発行年	2015-03-31
シリーズ	ベトナムシンポジウム 2013 Overseas Symposium in Vietnam 2013
図書名	日越交流における歴史、社会、文化の諸課題
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00001086">http://doi.org/10.15055/00001086</a>

# 東遊運動から東京義塾へ

## ——『文明新学策』を中心として

橋本和孝

### 要旨

明治期の越日交流に大きな足跡を残したのが、ファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu）を中心とした東遊運動（1905～1909年）であった。東遊運動は、ベトナム版「日本に学べ」運動であるが、フランス植民地からの民族独立運動と結びついていたのである。だがベトナムの近代化という見地からすると、むしろファン・チュウ・チン（Phan Châu Trinh）を中心とする東京義塾設立（1907年3月）の動向こそ、その推進者であった。東京義塾は、フランス植民地下のベトナム啓蒙派知識人の民間学校運動（私塾）である。東京義塾の目的は民衆の啓蒙にあり、無料で初等教育レベル、中等教育レベル、大学レベルの三段階の授業が実施され、教育部門に加えて、振興部門（学校の影響を拡大するための部門）、教材部門、財政部門の四部門が設置された。

今回の報告では、東京義塾の形成とそこで使用された教科書の一つ『文明新学策』（Văn minh tân học sách）に関する研究成果を発表し、越日国交回復40周年に寄与することにしたい。『文明新学策』は、著者も発行年も不明で、原文は漢文ながら、フランス植民地下のベトナムの制度・文化・経済・社会について転換を求めた重要文献なのである。

\* \* \*

### 1. ファン・チュウ・チン廟

ホーチミン市にある、潘周楨廟には、「中学猛軻西学廬致向而表 昔越南革命政治之大家」と刻まれている。<sup>1</sup>

1925年、14年ぶりにフランスから帰国したファン・チュウ・チン（Phan Châu Trinh, 潘周楨, 1872-1926）は、結核を悪化させ、1926年5月24日夕方、56歳で息

---

1 「中学猛軻西学廬致向而表」とは、中国の孟子や西洋のルソーまで貴君の中に体现されているとの意味と解せられる。なお本稿の2～4章については、基本的に橋本（2014）に依拠している。

を引き取った。彼の死は、ベトナム民衆を悲しみの淵に落とし込め、当時のサイゴンでの葬儀には1万6000人の民衆が参加した。葬儀は、憲政党の創設者、ブイ・クアン・チュウ（Bùi Quang Chiêu）や著名な弁護士、ファン・バン・チュオン（Phan Văn Trường）、『東法時報』（*Đông Pháp Thời Báo*）の主筆、チャン・ファイ・リュウ（Trần Huy Liệu）が取り仕切った。葬儀にはベトナム人のみならず、多くの中国人、フランス人、カンボジア人やチャム族が参加した。フエの葬儀は、ファン・ボイ・チャウ（Phan Bội Châu, 潘佩珠）が委員長となり、「貴君は剣や銃ではなくその舌をもって権威を怖れさせ、太鼓や鉦のファンファーレではなく、ペンでもって民主主義の灯を照らし、終始不動の共和主義の道を歩み、生死に拘らず貴君の国の独立への叫びが我々を捉えています」と讃辞を贈った。

チンの死はその後2年間、国中にストの波を喚起した（Vinh Sinh, 2009: 37-38; Hue-Tam Ho Tai, 1992: 157; Trần Văn Giàu, 2013: 75）。

本稿は、ファン・チュウ・チンを中心とする東京義塾の形成とそこで使用された教科書の一つ『文明新学策』（*Văn minh tân học sách*）を取り上げ、フランス植民地下における20世紀初頭のベトナム近代化運動という見地から、越日国交回復40周年に寄与することにした。

## 2. ファン・チュウ・チンとファン・ボイ・チャウ

### （1）ファン・チュウ・チン

その逝去が闘争を喚起した改革派であるファン・チュウ・チンは、ファン・ボイ・チャウと並ぶ、フランス植民地下、20世紀ベトナムの独立運動のリーダーの一人であった。チンは1900年に郷試に合格、翌年会試に合格し、1903年に礼部承弁として役人になった。「新書」「新報」と呼ばれる中国からの（ないしは中国経由での）、人民の権利と自由を論じ、西洋文明について記した著作、特に梁啓超と康有爲のそれがベトナム知識人に多大な影響を及ぼしており、チンは1904年頃、梁啓超のそれに接して自らの思想の進化に重要な影響を及ぼしたのである。

### （2）ファン・ボイ・チャウ

他方、ファン・ボイ・チャウは、20歳で革命家となることを志し、やがて極秘に勤王運動に関わるようになった。1900年にゲアン省の科挙の候補者リストに載り郷試に合格した一方、フランス支配への武力攻撃を通じて独立した政府の樹立を目指し、そのため外国からの援助を求めるために、使者を海外に送り出そうとした。具体的には、ファン・ボイ・チャウは、日本が黄色人種で唯一近代化を進めた国だとみなし、フランスからの独立運動の援助を明治政府に求めようとした。

### 3. 東遊運動

#### (1) 東遊運動について

明治 38 (1905) 年 5 月末か 6 月神戸に上陸したファン・ボー・チャウは、横浜に到着し、梁啓超 (Lương Khải Siêu) を訪ねた。チャウの著書的一篇で梁啓超の「まえがき」が記された『ベトナム亡国史』(1905 年) は、横浜で執筆されたものである。後に横浜で居住した 2 階建ての日本家屋は、丙午軒 (ビンゴウヘン) と呼ばれ、東遊運動の拠点となり、日本人から日本語を学習するためのセンターであった。1907 年春には丙午軒は東京に移動し、秋には、10 歳以下の子ども 3 人を含む、100 人以上の若者が到着した。既に丙午軒ではやはり 100 人以上が勉学に励んでいる状況であったので、若者たちは、目白の東亜同文書院に入学を許された。

カリキュラムは、午前中は日本文化と日本語に加えて、数学・地理・歴史・化学・物理・修身を学び、午後は軍事知識と軍事訓練であった。

#### (2) ファン・チュウ・チン来日

1906 年、ファン・チュウ・チンは日本に向かった。それは第一にファン・ボー・チャウの日本に留学生を送る考えには賛同していたが、チャウの君主制的で、暴力是認で、外国の援助に頼る独立路線には賛同できなかったため、彼と話し合う必要があり、第二に「近代化した」日本を見てみたいという点にあった。

ファン・ボー・チャウはファン・チュウ・チンを伴って初夏、東京の学校や名所、政治教育の殿堂を視察した。この東京の学校のなかに慶應義塾大学が含まれていたかどうかは定かではないが、少なくともファン・チュウ・チン滞在中に、そこを訪れていたと考えるのは、後の東京義塾開塾という事実からして自然である。

### 4. 東遊運動から東京義塾へ

#### (1) ベトナム近代化の追求

チンの日本滞在の経験は、近代化は独立を考える前に必要であり、近代化なしのベトナムの独立は、強固な力を保持するためには脆弱である、という確信となった。帰国後、学校づくり、学会の創設、商業団体・農業団体の創設、商業協同化の推進、地域の内発的な発展を奨励して、例えばクアンナムではシナモンの木やお茶、さとうきびの植栽、各種の砂糖製品や織物の生産を鼓舞した。また自ら商会を設立し、シナモンの木の農園を所有した。科学の無駄を指摘し、民衆の知性と国民の才能を育成する必要があったので、近代技術を強調した新しいカリキュラムで教える学校を開設しようと考えた。究極的には、国内生産物と産業を発展させることで生活水準を改善し、生活条件を向上させることが目標であった。断髪を奨励し、短髪は勇

気と近代化と反抗の象徴であった。理髪店は1907年までにクアンナムではよく繁盛した。

## (2) 東京義塾開塾

1907年3月、彼を中心に友人たちと東京義塾 (Đông Kinh Nghĩa Thục) を開学した。絹織物商で中国学者のルオン・ヴァン・カン (梁公玕, Lương Văn Can, 1854-1927) を塾長に、塾監はグエン・クエン (阮權, Nguyễn Quyền, 1869-1941) であった。東京 (トンキン) とはハノイの旧称であり、同時に文字どおり東京をも意味していた。義塾はもちろん慶應義塾をモデルにしたものであった。

学校は当初ハノイの旧市街のハンダオ通り4番地のルオン・ヴァン・カンの家に設置され、後には拡大して10番地に移動した。学校には、教育部門、振興部門 (学校の影響力を拡大するための部門)、教材部門、財政部門の四部門が設置された。また目的は民衆の啓蒙にあり、無料で初等レベル、中等学校レベル、大学レベルの三段階の授業が実施された。初等レベルでは、ローマ字での国語 (quốc ngữ) が教えられ、中等学校および大学レベルでは、むしろ漢文や希望者にはフランス語が教えられた。

## 5. 『文明新学策』を読む

### (1) 福沢諭吉・梁啓超から『文明新学策』へ

教科書の一つとしてファン・ボイ・チャウの『海外血書 初編・続編』(1906年) が使用され、義塾の学生に愛読され、愛国主義を鼓舞した (川本, 1966: 284; Nguyễn Tiến Lực, 2008: 89)。なかでも重要な文献が『文明新学策』であった。『文明新学策』は、著者が不明で、発行年も明白ではない。また原文は漢文であるが、国語への翻訳がなされている<sup>2</sup>。

書き出しは「謙虚にみて、偽りなく文明とは美しい用語ではあるまいか。文明は、新しい学問をもたらし、幸福をもたらす。それは一朝一夕でできるものではない。それは、偉大な学説が持つ、素晴らしい利点から導き出されるものである。学説とは何か。民衆の文化と知識を開くものである」で始まる。

続いて「地球上の国には、未開の国や、半ば文明化された国や、文明国がある。民衆の文化と知識は、開放的か閉鎖的か、豊富なのか貧弱なのか、進んでいるのか遅れているかということに比例する」という。原文は、「地球之有国也若者為野蛮若者為半開若者為文明」である。

これは、梁啓超が人類を三級に区分して、一は野蛮の人なり、二は半開の人であ

2 以下、『文明新学策』の訳出部分についていちいちページを示さないが、『文明新学策』原文: 3～25、および Anonymous (1907): 141～154による。

り、三は文明の人である、世界の人類が文明の三段階、野蛮—半開—文明の諸「階級」に分かれ「順序を踏んで上昇する」ことが「世界人民公認」の「進化」の公理である、という指摘と照応する（梁、1972: 8; 石川、1999: 111; 廬、2005: 160; 川尻、2010: 142）。

さらに淵源は福沢諭吉の『文明論之概略』（初版、1875〔明治8〕年）における「今、世界の文明を論ずるに、欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳其〔トルコ〕、支那、日本等、亜細亜の諸国を以て半開と称し、阿非利加及び澳太利亜〔オーストラリア〕等を目して野蛮の国といい、この名称を以て世界の通論となし」にまで遡及可能なのである（福沢、1995: 25）。あるいは『学問のすゝめ』（1880〔明治13〕年）には「文明開化とて文字も武備も盛んにして富強なる国あり、或いは蛮野未開とて文武とも不行届にして貧弱なる国あり」との記述がある（福沢、1978a: 28）。つまり福沢諭吉の影響が梁啓超経由で、この『文明新学策』には現れていたのである。

## （2）ベトナムの閉塞点

次に「文明と民衆の文化と知識は因果関係にある。だが民衆の文化と知識を開くためには、閉塞している所をはっきりさせる必要があり、その後発展が生じるのである」と指摘し、閉塞点をえぐり出す。

「我が大南は大文明国である。そこは熱帯と温帯に属している。土地は肥沃で、気候は釣り合いがとれ、稲と蚕が豊富である。山海の利は、世界の他の国々を凌駕している。民衆は、困難なく生計を立てられる。歴代の王朝を通じて、聖君と賢相が、この国の一層の繁栄と威信、および強化を図ってきた。国境の内外で、文明国としての名声ははるかにとどろいていた」。「だが今日ではどうであろうか。山林の大切な資源はもはやない。龐大な財貨から導き出された利益を保持することはできない」。各種の工業技術製品を中国か西欧から輸入しなければならないからである。

そこからベトナムにおける農業・商業・工業の現状を問題にし、さらに「諸君が高官になろうと欲するならば、新書や新報を読むことを慎むべきである。しかし、それらについて聞いたことがあるならば、それらを隠したり、聞いたことがないかのように覆い隠すならば、何も知らないかのように、奴隷根性を養成し続けていられるならば、何たる人格で嘆かわしいことである」と官吏のあり方に言及する。

反対に「わが国の文明が、絶えず静的である一方、西欧文明が躍動感に満ちているのは、周知の事実である」と述べ、ルソーの『民約論（社会契約論）』、スペンサーの『進化論』、モンテスキューの『人権講話』に言及する。ベトナムで学んでいる学問は中国（北人）の書物であり、注釈を付けている教材は古人の話である。「試験にでる素材は、古典の解釈であり、五言、四字句、六字句の詩である。それが教育において、我々を他国の人々から区別する材料である」。

いわば古色蒼然としているという評価だが、「行政システムに関しては、変更し



たり修正することさえ、禁じられる。人材登用の際に、彼らの沈黙と服従を重視する」と、官僚制をも問題にする。

最終的に、根本的原因を以下のように剔出する。第一に外部から到来するものを野蛮として中傷する一方、自己の実績を高く評価する傾向であり、第二に、属国の道を軽蔑しながら、堂々と「王」のやり方を貴ぶことに由来し、いかに他国が、富と権力に到達したかについて学ぼうと悩んだこともない点である。

第三は、新しいものはすべてが間違っており、古いものはすべてが正しく善いものであるという思考習慣で、第四が、官尊民卑の態度が生じており、我が村々に広がる現実の状況に決して関心を払わない点である。

### (3) 民衆の文化と知識を開発する方法（文明新学策）

ここから「今日、くまなく探した後、幾千の困難の中で、民衆の文化と知識を開発する可能性について徹底的に考えた後、我々は唯六つの方法を明確化できた」と、改善策（文明新学策）を提起する。具体的には①国語の使用、②書籍の校定、③試験システム（科挙）の改定、④才能を鼓舞すること、⑤工芸の発展、⑥新聞の発行である。

①国語の使用では、ポルトガル人の宣教師たちが、国語（quốc ngữ）という文字を発明した。「それは、学ぶことを極めて容易かつ高速にした。我々は、それを採用すべきである。国民が学校に行くとき、数ヵ月のうちに、彼らが読み書きできるように、最初に国語を学ぶ必要がある。我々は、過去の出来事を記録し、現在起きていることを記すため、国語を使用する必要がある。我々は巧みに我々の考えを伝達できるように、手紙などでそれを使用してよいのである。それが我々の知性を開発するという我々の第一の使命である」と提起する。

②書籍の校定では、どんな本が読まれ、あるいは読まれなないかを決定するために、出版社を設立するべきである、と指摘する。「『孝経』、『忠経』、『小学』などの注釈集、東西の古典的思想家の嘉言や慈行についての書籍、人心や世道に有用なものが出版されるべきであり、すべてこれらには大要が示されていて、国語に訳され、一卷にまとめ上げられるべきである。その本は、初等クラスの読み物として使用されるべきである」と提起する。また古典は原文が保持されるべきで、連続する王朝の興亡・形成様式・制度に関わる歴史書を保持するべきである。それを国語に訳すべきであり、ベトナム史の大要を考えるべきであると述べている。

③試験システム（科挙）の改定では、「古典の解釈・押韻散文・詩・布告・法令・論文・政策議論、これらすべてが、我々の試験問題を構成している。我々には、入門・継続・開始・締結・明瞭・声律・比較と呼ばれるスタイルがあり、ここにどんな実用性を求めることができるのだろうか。昔の学者や試験の若年合格者のうち、誰が、五大洲が何であるかを知っているのだろうか、我々は今何世紀に生きているか知っているのだろうか」と、科挙制度について疑問を提示する。

しかし、まだ西洋のように専門的分野を確立できていないため、人を選抜する際に文献に頼らなければならないものの、今日では、暫定的に、いくつかの理にかなっている論文のみと政策論議を利用するべきであるという。「我々の試験問題は四書五経、十三経とその解説書、およびベトナム史・中国史・西洋史から出題する必要がある。我々は、学生がその考えに負われる何らかの制約やそのスタイルに関連した規則なしに、自由に議論し疑問に答えることを許すべきである」と具体的に科挙制度の改革に踏み込んだ提案を行っている。

④才能を鼓舞するでは、書物が改定され、登用試験の規則が修正され[るならば]、希望を託す者たちは、数千人の書記官・事務員・官吏候補・指導者・教員代理・医師・進士・舉人・秀才たちであるという。例え、彼らが耳にしたことから、新しい考えを展開できなかったとしても、彼らの文化と知識に新たな道を開くはずであり、そうすれば何もかも一新され、それから新旧世代の衝突が生ずるはずである。国子監は官吏育成の場所であるが、彼らが今日の実際の問題とは無関係に昔の文献に属するものをすべて教え学んでいた。

「欧米語を学べないことに関して、我々は公法・西洋法制史・教育機関・地図・数学などについての書を扱う学院を設立すべきである。勉学プログラムを策定し、就学期間を正確に記載すべきである。学生が相互に質問し合い教え合うように鍛錬すべきである。毎年試験が行われ、試験に合格すれば、欠員補充に当てられるであろう。このやり方で数年以内に、古い社会は徐々に新しい社会に場所を譲ることだろう」と未来展望を語っている。

⑤工芸の発展では、西洋で新製品が発明された場合には、民衆がそれを真似するための困難はない。北人（中国人）が製造できるものは、我々もまたたぶんそれ以上にうまく製造できるだろう。だが中国製と比べて、洗練されていない。「我々は、技術を改善する方法を知らないからである」と問題をめぐりだす。工芸は、国家にとってきわめて本質的な要素であるので、立派な教師を採用し、モデルとして立派な製品を使用するために購入すべきであると提案する。「手先が器用で理解の早い者を選び、学校に送るべきである。朝廷は密接に彼らの学習の進展に関心を持つべきである。国中で新しい方法を学習し、新製品を発明し、欧州のようにお祝いの賞状を与え、名誉官吏の称号で評価し、報酬を与え、発明は特許で守られるべきである」と発明を奨励した。

⑥新聞の発行では、サイゴンとハイフォンではフランス語で書かれた新聞を持っているものの、人々はほとんど読むことができず、漢文で書かれた唯一の新聞がトンキンの『同文日報』である。そこで、首都であるフエに「新聞社が創設されるべきであり、多くの学者（紳董）とともにその社主として大臣を据えるべきである。新聞の半分は国語で執筆され、半分は漢文で執筆されるべきである。その新聞では、効果的な教育機関や刺激あふれる考え、珍しい職業、欧米の美しい工芸品について掲載すべきである。新聞購読料は低額で維持され、特定の日には、全村社の高官で



あろうとなかろうと、朝廷であれ地方であれ、全役人に無料で配布されるべきである」と国語と漢文の新聞の発行を提案した。

#### (4)『文明新学策』の結論

『文明新学策』は結論として、「新たな舞台に紅の幟（のほり）と赤旗を掲げよう。我々の熱意がさめぬよう、我々は世界の主流に自分自身を投遊すべきである。我が民衆がその思想によって競争的になるよう、その競争的精神によって思慮深くなるようなやり方で、我が文明の力学を刺激し、変化する時代を把握しようではないか。そうしてこそ文明に関する様々な新しい学問を獲得できよう。一度その効果を把握したならば、あらゆるものが円滑に作働するであろう」。「民衆の文化と知識が高い水準にあると称賛されるためには、文明の膨張力を高める必要があり、そして、その結果、文明の基盤は永遠に持続する」と、やや楽観的ではあるが、啓蒙的に、いわゆる「文明開花」を提起した。

#### (5)『文明新学策』の論点

以上詳細に見てきたように、『文明新学策』は、実学的にフランス植民地下のベトナムの科举制度・文化・経済・社会について転換を求めた文献であった。それは20世紀初頭のベトナムでの「近代化運動の唯一のハンドブック」と称されるものであった（Duong Thu Hăng, 2010）。

しかし、残された論点として第一に発行年問題がある。この点について、1907年説をとっている者がいるが（Truong Buu Lam, 2000: 141）、筆者は1904～05年とみなしている。<sup>3</sup>というのは、「中国では、1900年から試験は前進しており」と『文明新学策』には記載されているにもかかわらず、1905年の科举廃止の決定については、記載されていないためである。また「国学院は、8～9年前に開設され、外交上の多くの輝かしい才能を訓練した」と記載されているためである。国学院が1896年に開設されていることを考えると1904～05年頃であるとみなすべきであろう。

第二の論点は、福沢諭吉との関わりである。前述のように文明の発展段階については、福沢の『文明論之概略』の文明の三段階説に依拠している。だがこれは梁啓超を通した福沢諭吉であり、福沢諭吉の著書そのものの影響であるとは直ちには判断できないのである。というのは第一に、梁啓超については、民衆の文化と知識を開花させるためには、（梁啓超曰く）家のように、「数千年に渡って住んでいたならば、再度居住できるように、建て直すために取り壊さねばならないはずである」と記載されているものの、福沢諭吉への言及はない。第二に、そもそも漢字仮名混ざり文の福沢の文章を、当時のベトナム知識人は、簡単に読むことができないという点がある。第三にワットやエジソンについての言及はあっても、福沢が高く評価するア

3 Pham Quang Trung (2012) は1904年頃と指摘する。

ダム・スミスについては記載されていないためである。福沢は言う。「アダム・スミス経済の定則を発見して、世界中の商売これがために面目を改めり。……世界中に幾千万のワット、スミスを生ずべし」(福沢、1995: 129)。したがって、『文明新学策』においては、まだ福沢の直接的影響は見られないと考えられるのである。むしろ康有為 (Khang Hữu Vi) の思想的背景を有する戊戌の変法の影響が想定されるのである。<sup>4</sup>

## むすび

『文明新学策』で示された方策は、ファン・チュウ・チンの近代化の実践に結びついていく。

最初 50 人の学生で始まった義塾は、1907 年 5 月に 500 人に達し、ついに 1000 人を越えたという。さらに梅林義塾 (Mai Lâm)、玉川義塾 (Ngọc Xuyên) のように東京義塾をまねた学校も登場し、農村部の三カ所に分校が設置された。ただし東京義塾は単なる民間学校であったわけではなくて、若者の眼を海外に向けさせ動員させるには、絶好の場所であったのであり、実際東遊運動の「秘密機関」としての性格を有していたのである。<sup>5</sup>その結果、フランス植民地当局は、設立から当分の間、教育機関として東京義塾を許可していたものの、若干の教師たちが学校外での演説で、植民地行政を公然と批判したという名目で、1908 年 1 月での閉校を命じたの

4 Dương Thu Hằng (2010) は、『文明新学策』と福沢諭吉の学校での学習内容と解決策という点で多くの類似性があると指摘する。むしろ、福沢の慶應義塾で目指した教育が、『文明新学策』と類似した点は見られる。ただ福沢が漢学を軽視し英語を重視したことと、『文明新学策』で国語 (quốc ngữ) を奨励したことはまったく異なる文脈である (福沢、1978b: 205)。むしろ筆者は、康有為 (Khang Hữu Vi) の思想的背景を有する戊戌の変法との関連を第一義的に問うべきと見なしている。すなわち光緒帝による改革には、八股文を廃止し、実学、実政による科举制度の改革、「西学」を取り入れた学校の設立、外国留学、出版の自由と、言論の自由、国力向上のための農工商業の奨励が含まれていたものであり、『文明新学策』と通底しているのである (野村、1964: 104-105; やすい、2010)。実際、『文明新学策』では、「中国では、1900 年から試験セッションは前進しており、八股文を廃止し、政策論議や論文だけを与えている」と指摘し、強学会の序文で「民衆の文化と知識を開こうと欲するならば、まず郷紳の文化と知識を開かねばならない」と書かれている。八股文の廃止は 1902 年であったが、強学会は康有為が 1895 年に設立した学会兼「政治団体」であり梁啓超も参加していたことから、戊戌の変法との関連を考究すべきであろう。しかも、康有為の変法運動が明治維新をモデルとしたものであったわけで (野村、1964: 104)、福沢諭吉の実践と通底していても偶然ではない。なお、当時のベトナムで『日本維新史』(『日本維新三十年史』廣智書局、1902)を一部知識人たちが眼にすることが可能であったものの、『文明新学策』との関連の有無については、今後の課題としたい。

5 プイ・バン・ハオによれば、「東京義塾は、千人の学生に愛国心と国への誇りを拡大し、国の独立と自由への闘争へと招き入れた」と評価している (Bùi Văn Hào, 2012: 288)。

である。

短命で終わった東京義塾であったが、国語（quốc ngữ）と、国の発展についての学習を新しい方法で奨励し、封建道徳と儒教的習慣を批判し、若者が産業や資本制経済を発展させるよう奨励したことで、ベトナム近代史に深い影響を刻印したのであった。

## 文献

- 福沢諭吉（1978a）『学問のすゝめ』岩波文庫
- 福沢諭吉（1978b）『新訂福翁自伝』岩波文庫
- 福沢諭吉（1995）『文明論之概略』岩波文庫
- 橋本和孝（2013）「ベトナム東遊運動と横浜中華街」<http://bungaku.kanto-gakuin.ac.jp/modules/news/article.php?storyid=352>
- 橋本和孝（2014）「東遊運動と東京義塾——ベトナム・アンチ・コロニアリズムとレシプロシティー」矢嶋道文編『互惠関係と国際交流』クロスカルチャー出版
- 石川禎浩（1999）「梁啓超と文明の視座」狭間直樹編『共同研究 梁啓超』みすず書房
- 川尻文彦（2010）「近代中国における『文明』——明治日本の学術と梁啓超」国際日本文化研究センター編『東アジア近代における概念と知の再編成』
- 川本邦衛（1966）「潘佩珠著作解題——年代順」潘佩珠『ヴェトナム亡国史他』平凡社
- 野村浩一（1964）『近代中国の政治と思想』筑摩書房
- 『文明新學策・Văn minh tân học sách』<http://lib.nomfoundation.org/collection/1/volume/1127/page/1>
- 梁啓超（1972）「自由書」『飲冰室專集』（三）台湾中華書局
- 廬守助（2005）「梁啓超の『新民』の理念」『現代社会文化研究』新潟大学、No. 33
- やすいゆたか（2010）「康有為の変法自強運動」<http://www42.tok2.com/home/yasuiyutaka/chinashisoushi/22kooyui.htm>
- Anonymous（1907）“A New Method to Study Civilization.” Truong Buu Lam（2000）*Colonialism Experienced: Vietnamese Writings on Colonialism, 1900-1931*. The University of Michigan Press, An Arbor
- Bùi Văn Hào（2012）Keio Gijuku ở Nhật bản và Đông Kinh Nghĩa Thục ở Việt Nam – Một cái nhìn so sánh, Nguyễn Tiến Lực（Tuyển chọn）, Nhật bản và Việt Nam: Phong trào văn minh hoá cuối thế kỉ XIX Đầu thế kỉ XX, Nhà Xuất Bản Đại Học Quốc Gia TP. Hồ Chí Minh
- Dương Thu Hằng（2010）Học - một giải pháp của hiện đại và văn minh, nhìn từ “Khuyến học” của Fukuzawa Yukichi và “Văn minh tân học sách” của phong trào duy tân Việt Nam, [http://khoavanhoc-ngonngu.edu.vn/home/index.php?option=com\\_content&view=article&id=972:hc-mt-gii-phap-ca-hin-i-va-vn-minh-nhin-t-khuyn-hc-ca-fukuzawa-yukichi-va-vn-minh-tan-hc-sach-ca-phong-trao-duy-tan-vit-nam&catid=85:hi-tho-qua-trinh-hin-i-hoa-vn-hc&Itemid=147](http://khoavanhoc-ngonngu.edu.vn/home/index.php?option=com_content&view=article&id=972:hc-mt-gii-phap-ca-hin-i-va-vn-minh-nhin-t-khuyn-hc-ca-fukuzawa-yukichi-va-vn-minh-tan-hc-sach-ca-phong-trao-duy-tan-vit-nam&catid=85:hi-tho-qua-trinh-hin-i-hoa-vn-hc&Itemid=147)

- Hue-Tam Ho Tai (1992) *Radicalism and the Origins of the Vietnamese Revolution*. Harvard University Press, Cambridge
- Nguyễn Tiến Lực (2008) Những Hoạt Động Của Phan Bội Châu Ở Nhật Bản (1905–1909). Nhà Xuất Bản Đại Học Quốc Gia TP. Hồ Chí Minh
- Phạm Quang Trung (2012) Giá trị mang tính lịch sử của “Văn minh tân học sách,” <http://www.pqtrung.com/but-ky-van-hoc/gi-tr-mang-tnh-lch-s-ca-vn-minh-tn-hc-sch>
- Trần Văn Giàu (2013) “Phan Châu Trinh, the promoter of democratization.” *Vietnamese Studies*, 187
- Truong Buu Lam (2000) *Colonialism Experienced: Vietnamese Writings on Colonialism, 1900–1931*. The University of Michigan Press, An Arbor
- Vinh Sinh ed. (2009) *Phan Châu Trinh and His Political Writings*. Cornell University, New York